

ルソーの女子教育論と女性観

横 山 ひろみ

ルソーは『エミール』の終章において「ソフィー」という一人の理想的な女性を作り上げることによって、女子の教育についての論議を展開している。彼は本質的には男と女の差別的男女優劣論には反対であるといわれる。彼によれば男と女との相違は性に由来したものであって、人間としては共通であり、かつ相互に補完的なものである、という。⁽¹⁾ つまり「男性と女性とは合体して一個の人格を形成するものである」という考え方で、人類の祖アダムが元来は両性具有の存在である（ユング）とする思想にも通じ、当時としてはきわめて斬新な考えである。もっともルソーがそこまで意識していたかは疑問であるが。いずれにせよ、男性と女性との特性を生かした教育があるべきだとすれば、それは相互に公平なものでなければならないのは自明である。ところが、ルソーが描きだした女子教育論はまったく男性中心あるいは随伴的、家庭夫人育成的なのである。ルソーが女性の教育の前提としてあげているのは、従順の徳、服従心の養成である。さらに、女性に必要な課目として、裁縫、画、勘定、策略の才、男についての研究などをあげ、早くから読み書きを教えることや、思弁的学問は女性には向かないとしている。このような女子教育論は、男性中心、家庭中心という点において、一見わが国の戦前の教育に類似している面がある。ルソーはソフィーの女性像を借りて彼の女子教育論を実施した。その一方で、『新エロイズ』のジュリによって自由人として男性と同じ学問教育のなかで育てることを試みている。この二人の女性の生涯の結末を対比させることによって、ルソーはいずれの教育が女性にとって真の幸福になるかを示そうとしたのである。

私は前著（『新エロイズ』から『エミール』へ二つの女性像の考察）に

において、ルソーはジュリというパラドックス的存在を借りてソフィーに対する教育の正しさを強調しようとしていることを指摘した。⁽²⁾ たしかに『新エロイーズ』と『エミール』の二人の女主人公の結末はそれぞれ象徴的であるが、しかし、ルソーの真意は果たしていずれにあったのかという問題は十分論議されていない。それためにはこの二人の女性のモデルとなった女性や、その生い立ちから成人までに関係した多くの女性たちとルソーとの交遊を詳細に分析してみる必要がある。その一人一人が彼に対して様々な女性観や性格傾向を導く役割を果たしていると考えられるからである。

まず、ルソーの生い立ちから年代順に、彼が接触した主な女性達を追ってみる。ルソーは1712年6月28日ジュネーブで生まれたが、同年7月7日に母シュザンヌを失っている。彼女は牧師の娘として生まれルソーの父の最初の妻であったが、聡明で優しく、愛情の深い、感じやすい性質で美しい女性であったという。母のことを語る時、ルソーはいつも慚愧の涙を流す。自分の誕生が彼女の死の原因であると考えられるからであり、このことは生涯彼の頭から離れなかった。病弱な赤子から辛抱強くルソーを育ててくれたのは、父の妹シュゾン叔母（シュザンヌ・ルソー）であった。ルソーにとっては生涯優しい叔母であり、いつも慎ましく情熱的で、音楽好きの女性であった。ルソーは彼女によって「音楽の趣味というより、情熱を教えられた」⁽³⁾ のである。おそらく、ルソーの抱いた亡き母のイメージは、父から伝えられた感傷的な母の像や、母を愛していたフランス公使ラ・クロジュールから、30年後に聞いたことなどによって美化されたものだが、その実体はこの叔母シュゾンに由来するのであろう。

「愛情が強く、情熱的で、聡明且つ美貌、音楽を含めて諸芸に優れる」など、後年ルソーが理想とした女性の性格や容姿の特徴の基礎はほとんどこの時期に培われたものとみることができる。ルソーはボセーで初めて、子供としての躰をランベルシェ嬢（ガブリエル・ランベルシェ、1683—1753）によって受けたが、彼女は「道理にかなった厳格さを持ち、母らしい威厳を備えていた」⁽⁴⁾ 女性であった。この品行方正で、美しい女性によって、彼は初めて性的感情に目覚めるのである。しかし、彼女の慎ましい生活態度は、彼の一生の好みに大き

な影響をあたえ、純潔への憧れから内気で臆病な性格も加わって、ルソーのマゾヒスティックな性格を形成したと考えられる。この性格は反動的に、商売女に対する嫌悪という形で表れたが、快樂的なものへの憧れ—それは『告白』の各所に鮮明に表れているが—、と嫌悪のアンビバレンツな感情は生涯ルソーを悩ませたものであったのである。

ルソーが初恋とも言うべき経験をしたのは11歳の頃、相手はいずれも年上の娘であった。一人はヴェルソン嬢、もう一人は彼よりやや年上らしいゴトン嬢である。ルソーにとって、ヴェルソン嬢は激しい恋の対象であったが、彼女は22歳、本当の恋人があり、ルソーはそのカムフラージュの相手として扱われたのである。初めての恋にすっかり「頭のそこから、のぼせあがって」いながら、その一方で、ゴトン嬢とも熱烈な恋を楽しんでいた。しかし、ゴトン嬢は「美しくはないが、忘れることの出来ない顔」をした娘で、年には似合わない老成した態度でルソーに接し、彼を翻弄したらしい。この二人の女性によって、ルソーは女の裏切りや嫉妬の苦しみ、同時に二人の女性と付き合うことのスリルなど、恋の手練手管を学んだことになる。

やがて徒弟奉公を重ねるうちに、彼の「高尚な精神」は次第に墮落し「下品な趣味や悪ふざけをする」相手として、女性をみるようになったのである。女性の気紛な恋の遊びに、時には自尊心を傷つけられながら、次第にその華やかさ、快樂に惹かれるものを感じ始めていた。しかし、ルソーは本質的に肉感的なものを受け付けにくい気質を持っていたようである。「燃える血は女を欲しがるが、私の興奮した心はそれ以上に愛を求める」気質なのである。その気持の昂揚は次第に「不自然な立場におかれて落ち着かぬ想像力は、やがてひとつのやり方で私の身を救い、目覚めてくる肉感を静めて」くれるに至る。そのやり方というのは久しく失っていた読書の趣味を取り戻したことにより、「読書中に興味を覚えた種々の場面を心の糧にし、変化させ、組合せを作り、自分が空想中の一人物になれるように私を適合させる」⁽⁵⁾のである。こうしてルソーは不満な現実を小説じみた状態のなかに入れこんで解決することを覚え、彼特有の人間嫌いの孤独癖の素地を作ってしまうことになった。「表れ方は陰鬱

だが、元々これはあまりにも人なつこく、愛情を求める優しい心が、自分と同じ人間を見だし得ないで、想像だけで生きていかなければならなかったことから生じたものである」⁽⁶⁾と彼自身は弁解しているが、この性格が後々さまざまな誤解と行動の矛盾を生むことになるのである。

ルソーがサヴォア公国コンフィニョンの司祭ポンヴェールから「かつて自分も迷いこんでいた、邪な道から他人の魂を救うことに努めている方」⁽⁷⁾として紹介された運命の女性ヴァランス夫人に出会い、「この時期が私の一生の性格をはっきり決めてしまった」と思い込むのは16歳のころである。ルイズ・エレオノール・ド・ヴァランスはこの時28歳、「愛敬したたる顔、優しさを含んだ美しく青い目、眩しいような血色、惚ればれするような胸の辺りの輪郭、背は低く、胴はやや太いが不恰好ではない」⁽⁸⁾女性であった。ルソーは一目みるなり激しい恋に陥った。ルソーにとって彼女は「なつかしい姉であり、楽しい女友達であり、愛人以上のもの」であった。そして、何よりも「自分の快樂を求めないで、私の幸福だけを考えてくれる母（ママン）として」であったという。この女性は、ルソーの人生に大きな影響をあたえ、彼の人生の後半では次第に理想化され、内なる心の女性となっていく。従って、ルソーのヴァランス夫人への感情を克明に追うことで、青春時代の彼の女性像成立の過程を捉えることが出来よう。

「行き当たりばったりの教育を受けた、人なつこく柔和な性格、不幸な人にすぐ同情する心、限りない親切、わだかまりのない率直な気質、そしていつも何かしていなければ気が済まぬ活動的な性質」⁽⁹⁾ルソーは、ヴァランス夫人の性格をこのように書いている。事業好きで野心家でもあったが、経済観念に乏しく、浪費癖のためにほとんどの事業に失敗した。ルソーが21歳の時、他の女性から彼を守るという名目で、ヴァランス夫人は彼と肉体関係を持つ。この時のルソーの感情はこう書かれている。「長い間一緒に暮らし、しかも清らかに過ごしてきた習慣は、彼女に対する私の愛情を弱めるどころかますます強くした。が、同時にまた、この愛情を少し変えて一層官能的でなくしてしまっていた。ママンと呼び、息子のような気安さで親しんできた結果、私は本当に子供

のつもりになっていた。あんなに恋しい人でありながら、自分のものにするのにあまり気が進まなかった真の理由は、そこにあると思う。」⁽¹⁰⁾ ルソーのこのような気負いの一方で、ヴァランス夫人は冷静だった。「彼女の方では、悲しそうでもなく、快活でもなかった。愛撫はしたが、平静であった。肉感的でない人で、官能の喜びを求めたわけではなかったから、歓喜にも達しなければ、後悔することもなかった」という次第である。これを期に愛人関係がつづくことになるが、あとで三角関係が繰り返されるように、夫人の性生活は当時の風俗習慣を考慮に入れてもやや特異といえる。「すべて彼女の過失は誤りから生じたので、情熱からきたのではない。育ちのいい人で、心は清く、正しいことが好きだった。その性向は真っすぐで道徳的だった。」などと、ルソーはむきになって彼女をかばう。そのような清潔な、道徳的な人が何故に性的に放縦であったのか。それは「正しく導く心に従おうとせず、悪しく導く理性に耳を傾けたからである」という。そして、その原因は少女時代の家庭教師による教育にあると、ルソーは断じている。このことはまた後で論議するとして、その他の女性との交友に触れてみることにする。

1728年、16歳の時ルソーはスピリト・サント修道院に入り、カトリックに改宗するが、修道院を出て再び放浪し、彫金の仕事を探していて、バジール夫人と会う。彼女は濃い褐色の髪の色、色っぽいイタリア系の美人であった。ルソーは彼女の仇っぽい、肉感的な姿態、お人好しで情の深い性格に、たちまち情熱を燃やす。しかし、結局は「手への熱いキス」で終わる。この出来事が「私の若き日の恋はこれで終わりを告げた」と彼が大げさに書き残すほど感銘を与えた体験だとは思えないが、少しの感情でも自分の感覚に触れるものであれば、心に潜ませ、ロマンをふくらませる材料とするルソーの性格がよく表れている。同じ種類の感覚だと思われるが、ルソーが一生の間良心の痛みとして心に残した女性がいる。ヴェルセリス伯爵夫人の料理女マリオンである。彼女は器量よしで、生き生きとした血色をし、おとなしく遠慮深い性格で、忠実無比、誰からも好かれる女性であった。ルソーは自分がリボンを盗んだ罪を彼女にさせた、その良心の呵責が生涯彼の重荷になったのである。ルソーの優しい性

格と、不正を憎む態度からすれば、この行為は意外に思われるのだが、少年の羞恥心がそうさせたのだといえる。しかし、このことはルソーにとって幸いでもあった。「ただひとつの罪の印象があまりにも恐ろしいために、終生、罪を犯しそうな行為からよく自分を守ることが出来た」⁽¹¹⁾ からである。何の恋愛感情も抱かなかったにもかかわらず、マリオンに対する贖罪の気持ちは、彼女の優れた性質として、ルソーの心にしまいこまれ美化されていったのである。

1732年、ルソーはシャンベリで再びヴァランス夫人と会い、以前から夫人宅の家政運営を任されていたクロード・アネとの三角関係が続けることになるがそのころ、音楽の趣味や教師として多くの女性と交際する機会が増えることになる。それらの女性を通して、ルソーの好み次第にはっきりしてくる。まず、ルソーはお嬢さんを好む傾向が強い。小間使い、お針子、売り子などには興味を持たない。その階層の女性にも彼の好みに近い女性がいたとしても、それらの良さは認めるが自分の対象としては考えないのである。マリオンに対してもそうであったし、ヴァランス夫人の小間使いメルスレとも二人きりで旅をしても何もなかったし、その友だちジローに至っては、彼女がありっただけの媚態を示しても「スペイン煙草で汚れた、かさかさで真っ黒な鼻面を近付けられると、唾でもはきかけたくなる」⁽¹²⁾ とさんざんである。ルソーの好みは「若々しい顔色、美しい手、優雅な衣装、全身に漂っている繊細で清潔な感じ、華奢な靴、リボン、レース、そして手際よく整えられた頭髪」などである。しかも貴族でなくても上層階級の女性でなければならない。彼の弟子の中で、「輝く目と、ほっそりした姿と、魅力的な態度」を持つラレード嬢、「小柄で愛らしく、臆病で、色白」なマントン嬢、「優雅な物腰や穏やかな気立てで、素直な」シャル嬢などはみな貴族の出であった。さらに、いくら美人でもその中に生き生きとした秘めた情熱を感じなければ、ルソーは評価しない。ベロンヌ・ラルールについてこの様にいっている。「ギリシャ彫刻のモデルさながらで、もし生命も魂もない真の美というものがあるとすれば、私はこの人を自分のみち中の一等の美人としてあげたい。」⁽¹³⁾ その上、ルソーの愛する女性は、自分

に何かをあたえ、感化してくれる人である。ヴァランス夫人の友人シャトレ嬢は愛嬌もあり、聡明で親しみやすい女性であったが、人生論的観察力に優れ、このような面で青年ルソーの人生観を感化したのである。

ここで再びヴァランス夫人に戻る。教養もあり、道徳的にも優れた思想を持つ人々との間に同等の愛情関係（三角関係）が成立するというのは、常識的には考えにくいことである。ルソーはこれについてこう説明する。「私たちはみんなが幸福になれ、死のみが破壊できるような結びつきのうちに生活していたのである。」そのような結びつきを可能にしたのは、すべてヴァランス夫人の性格の優れていたことにより、「この人を愛した人間がみな互いに愛することが出来た」ためであるという。しかし、これはルソーの独善であり、やや負け惜しみの的なところがある。夫人は明らかにクロード・アネの方をより愛していたのである。アネが夫人との諍いで毒を飲むまで、ルソーは二人の關係に気が付かなかったのだが、それは二人がきわめて用心深くその關係を隠していたことや、毒を飲んだときの夫人の異常な心配と興奮から知ることが出来る。従って、その關係を知ったとき、ルソーの自尊心は深く傷ついたはずである。しかし、その自尊心が、アネの非凡さを認め、自分との性格的な共通性を強調し、ヴァランス夫人の広い愛情を賛辞することで、辛くも面目を保ったのである。このヴァランス夫人の性格は、『新エロイズ』において「ジュリ」として再現されることになり、クロード・アネとの相互に信頼し共有し得る三角關係として、ジュリ、夫、サン・プルーの三人のクラランでの共同生活に具現されることになる。一方、この頃のルソーの健康状態は最悪であった。その治療のためにモンペリエに赴く途中ラルナージュ夫人に出会い、肉体的な逸樂を味わうのである。この年上（45歳）の女性との恋によって、ルソーは「男であり幸福であることに誇りを抱きつつ、喜びと自信を持って官能に身を委ね、相手に与えた快感を共に味わう。そして勝利の対象を、自惚れと快樂の気持ちで眺め、そこから勝利感を倍加するものを引き出す」と、初めて性の征服感に酔い知れたのである。

シャンベリに戻った時ルソーは26歳になっていたが、留守中には異変が起こ

っていた。ヴィンツェンリードという髪結い職人に自分の役割を奪われていた
のである。もちろん、それはヴァランス夫人の意志でもあった。彼女は次のよ
うにルソーを納得させようとした。「あなたはまだ子供だ。人間はこれくらい
のことで死ぬものではない。あなたは何も失うわけではなく、二人は依然仲良
しで、あらゆる意味において親しさは変わらないだろう。あなたに対する愛情
は、自分の生きているかぎり衰えも、終わりもしないだろう」と。「あなたの権
利はすべて以前のままであり、他人と共有するからといって失われるわけでは
ない」ことを理解させようとしたのである。ルソーの賛美にもかかわらず、この
言葉からも、我々はヴァランス夫人に何か不誠実な、やや、いい加減な気質を
感じるのである。いずれにしても、彼女の申し出に対するルソーの言葉はきわ
めて純粹で誠実なルソーの性格がよく表れている。「私の愛は強すぎます。あ
なたを汚すようなことは出来ません。あなたの体は私には大切なもの、共有な
ど出来ません！（ルソーもここではかなり頭にきているといえる）あなたをわ
がものにしたときの後悔の念は、その後愛情が増すにつれて大きくなってしま
した。そんなにまでして、これ以上あなたをわがものにしておくことは出来ま
せん。あなたは永久に私の崇拜の対象になるのです。いつまでもそれにふさわ
しい方であってください。……心の結びつきのためには、私は快樂をすべて犠
牲にします。愛する人を汚すような快樂を味わうくらいなら、千回も死んだ方
がましです！」⁽¹⁴⁾、この激しいルソーの心情は、しかし、夫人には理解され
なかった（ヴァランス夫人はルソーのいうように、本当に聡明な女性であった
のだろうか？）ルソーが自分自身に課した禁欲をヴァランス夫人は認めたふ
りをしたが、そうした男を決して許そうとしなかったのである。自尊心を傷つ
けた相手として。ルソーもそのことに気が付いていた。「思索好きで官能に無
関心な女性でも、たとえその女性がまったく意に介していない男でも、彼女の
肉体を自由にし得るとき、何もしないということは彼女に対するもっとも許し
がたい罪となるのだ。」⁽¹⁵⁾ ルソーは女性の本質を正確に捉えていたといえよ
う。二人の仲はだんだん冷たくなり、ルソーはついに「ママン」の家をでて
リヨンに向けて出発した。この時、ルソーは29歳であった。ヴァランス夫人と

再会するのは1754年、13年後、42歳の時である。その時、「ああ、なんという有様！ なんという落ちぶれよう！ 彼女のむかしの美の気質がどれだけ残っているのか。」⁽¹⁶⁾と、ルソーは嘆くが、すでに妻、テレーズへの愛に気を奪われていて、十分なことをしなかった。「生涯に感じた後悔のうち、もっとも強く、もっとも消えないのがこれである」という後悔の念は、次第にヴァランス夫人の美化へと変わり、彼女は現実の女性からもっとも聡明な、もっとも思索的な、もっとも肉欲に淡泊な理想の女性として昇華されていったのである。ヴァランス夫人の死は、1762年7月29日、ルソー50歳、『エミール』および『社会契約論』の公刊によって迫害が始まったときである。

ヴァランス夫人と共に過ごしたレ・シャルメットにおける療養の日々は、ルソーにとって自己研鑽の時であった。哲学、論理学、文学、音楽、ラテン語、地理学、天文学、数学、植物学、医学など、ほとんどあらゆる分野の学問を独学で勉強し、それらをすべて自分のものにした。さらにその成果を論文として発表し始めたのである。ヴァランス夫人と別れ、リヨンのマブリ家の家庭教師として就職したルソーはその体験を『サント・マリのための教育案』としてまとめた。これが最初の「私教育論」である。その後、ルソーはパリに出てロガン、デイドロ、フォントネル、マリヴォなどと知合い、それらの人々から多くの啓発と援助を得ながら、主にオペラの作曲を中心に活躍する。1745年テレーズに会うまでの4年間、女性たちとの付き合いはデュパン夫人など表面的なものに終わっている。

テレーズ・ル・ヴァスールは1721年9月21日、オルレアンに生まれ、ルソーより9歳下で、彼の子供を5人生み、彼の後半生を支えた女性である。ルソーによれば、テレーズは「単純な頭」、「教育は不可能」、「精神は自然のまま」ではあったが、「その淑やかな態度」、「心の優しき」、「生き生きとした眼差し」などに一目で惹かれたという。田舎娘であったが、十分ルソー好みの気質をもっていたのである。「最初は、ほんの慰み者にするつもりであった」テレーズだが、一緒にいるうちに、次第に「それが私の幸福にも大いに役立っている」ことを感じ、一生の伴侶としてしまったのである。そのような気持ちになった

のは、「ママン」との別れによる心の傷を癒したかったということかもしれない。しかし、「私の心は空虚だった。だが、それを満たすにはただひとつの心で充分なのだ」というルソーの自己中心的な生き方を貫くためには「素朴で従順な心の持ち主が必要」だったのである。ここに、当時の、あるいはあらゆる時代を通じて共通な、男性中心的女性観の本質がルソーにもよく表れている。つまり、「素朴で従順な心」はルソー自身のものであり、ルソーはそれを「ママン」によって開発された。ルソーに欠けていたのはただひとつ、その「心」をもった女性であったのだから、そうした女性さえいれば「輝かしい将来」を築くことが出来る、と彼は考えるのである。⁽¹⁷⁾ 「女子には従順の徳や服従心を養成しなければならない。そのためには早くから拘束や強制による教育を施し、それに慣れさせなければならない」⁽¹⁸⁾ という女子教育の基本的な考え方はこれらの体験に由来するといえよう。しかし、ルソーには理想の女性像が出来上がりつつあった。前に述べたように、それは貴族階級に漂う繊細な感覚であり、高い教養と知性であった。自分の愛する伴侶にそうあって欲しいと願うのは当然で、ルソーはさまざまな教育をテレーズに施す。しかし、それは「骨折り損」であることに気が付く。「教育の入りこむ余地」がなかったのである。第三者から見た現実のテレーズは、無知で、愚鈍で、嫉妬深く、口が悪くて怒りっぽい、喧嘩好きで、農民にありがちな一種の狡猾さを持っており、ルソーの機嫌をうまくとって彼に取り入っていた、という。⁽¹⁹⁾ これに対して、『告白』にあるルソーの彼女に対する評価は高く、無学であっても、単純で、素朴で優しい性格で、自分に献身的に尽くしてくれる女性である。いずれが本当のテレーズであったのだろうか。「私を私のテレーズと結びつけた日を私の道徳的存在を決定した日と考えてきた」「この娘の優しい性格はいかにも私と似合いとも思われる」「この若い娘には美点が沢山あり、当時は顔立ちがよくていかにも愛らしい。技巧や媚態の影もない。」⁽²⁰⁾ ルソーの、これらの褒め言葉はかなり意識的に美化されている。「彼女を一目見たときから今日まで、彼女に対して恋のひらめきを少しも感じたことがない」というルソーの言葉の方が真実であったであろう。自分自身の才能と、業績に自信をもつ彼は、それに応じ

た高い社会的地位が与えられるべきだと考えていたし、それにふさわしい伴侶として、ルソー夫人があるべきだったのである。だから、最初は「彼女と一緒に外出するのが」恥ずかしかったのである。しかし、望むべき理想の妻は得られず、子供がつきつぎに生まれるに及んで、次第に開き直り、自分の論理にあわせるために、テレーズを美化せざるを得なかったのであろう。ルソーは確かにテレーズを愛してはいた。だが、その生来の卑しさや育ちの悪さ——その多くはテレーズの母親や、兄弟たちに表れている性格なのだが——にはつくづく辟易していたに違いない。テレーズの美点を帳消しにする、そのような彼女の家庭環境への苛立ちが「自然がこしらえたままの精神」を適正な方向へと導く教育の必要性に発展したひとつの動機になっていると考えられる。

「パリでは女の手を借りずには何もできん。女というものは曲線で、利口な男はその漸近線なのだ。絶えず接近するが、決して接触しない。」⁽²¹⁾ カステル神父のこの言葉どおりにルソーは学問に熱中し、多くの著作を発表していた。デピネ夫人の援助を受ける1955年頃、ルソー自身が「積極的で、強いルソーに変身した」というほど、すべてに充実した年月であった。テレーズとの生活も安定し、この頃には女性を客観的に眺められる余裕が生じていたし、また学問に対する評価からくる自信が年とともに重厚さを加え、軽々しく行動することはなくなっていた。デピネ夫人はやがてルソーの生活に多くの影響を与える人となるが、彼は彼女について次のように書いている。「そんな色っぽいことはデピネ夫人のそばでは絶えて頭に浮かばなかった。一生涯彼女の側で暮らしたとしても、ただの一度もそんな考えは起こらなかつたろう。彼女の人柄に反発していたのではない。逆である。私は恋人として彼女を愛するにはおそらく友人として彼女を愛しすぎたのであろう……彼女はひどく痩せていて、ひどく青白く、胸はぺしゃんこである。私の心も感覚も、乳房のない女はどうしても女と認めないのだ。」⁽²²⁾ ルソーはおおよそ彼の好みからほど遠いデピネ夫人を、熱愛する女性としてでなく、機知に富む友人として扱っていたのである。しかし、彼女のパトロン的な束縛と屈従に耐えられず、ついに逃げだすことになるが、このことがルソーの運命に大きく影響する。つまり、デピネ夫人を通

して、ルソーの女性観に大きな影響を与えた、もうひとりの女性、ドゥドト伯爵夫人に出会うことになる。1748年2月、ルソー36歳の時である。

ソフィ・ドゥドト夫人、1730年12月18日生まれ、デピネ夫人の義妹、娘時代の名はベルガルド嬢。ルソーは彼女を次のように表現している。「30歳に近く、決して美人ではなかった。顔にはあばたの跡があり、色ももうひとつ冴えないが、表情は生き生きとして、優しく愛くるしいのである。豊かな黒髪がふさふささと波打って自然のカールをなし膝まで垂れていた。小柄で立居振舞いにはぎこちなさと淑やかさが同時にうかがえる。ごく自然で、ごく快活な精神を持っている。陽気と粗忽と無邪気とがうまい具合にそれと結びついている。感じのいい機知に富んでいたが、それは求めて言いだすのではなく、時に我にも非ず口をついて出るのだ。趣味の広い人で、クラヴサンは弾く、ダンスはうまい、可愛げな詩も作る。性格といえば、これは天使のよう、優しい魂がその根本だったが、慎重と力強さとをのぞけば、他のあらゆる美德を集めていたのだ。個人的な交際では信頼がおけ、社交界ではごく誠実な人だった。」⁽²³⁾ ルソー好みのあらゆる気質と性格を持っていた女性だった。この頃ルソーは44歳、すでに現実の熱烈な恋の時期は遠去りつつあるのを感じ、空想と追憶の世界のなかで甘美な熱情に酔い知れようとしていた。その心を胸に彼は『新エロイーズ』を著わした。この意味でこの小説はルソーの「体験的告白ロマン」であったのである。彼は言う。「私の心情のふたつの偶像、恋愛と友情とをもっとも魅惑的なイメージにして、心に思い描いた。私のかねて懂れてきた女性なるもののすべての魅力で、そのイメージを飾って楽しんだ」と。

「一人は栗色の髪、もう一人はブロンド。一人は活発で、もう一人は淑やか。一人は聡明で、もう一人はか弱い。が、人の感動を誘うか弱さであって、徳が一層引き立って見える。」⁽²⁴⁾ こうしてルソーが多くの女性達と接触して作り上げた理想像がくっきりと浮かび上がっている。『新エロイーズ』のジュリとクレールはこのようにして出現した。彼女たちは彼のもっとも嫌う「信じられないほどの偏見、打ち勝ちがたい片意地、感情的な判断に固執する、気違いじみた不条理」など、デファン侯夫人のような性格は持たない。さらに、それら

の持つすべての美德に対応できる、自分自身の姿として、サン・プルーを設定したのである。彼はルソーの美德も欠点もすべて備えていた。また、ジュリの性格や容貌には明らかにルソーが愛した、ヴァランス夫人、グラフエンリード嬢、ガレー嬢、セール嬢等の面影が隠されている。それらはすべて、ドットト夫人を媒介にしてジュリーに集約されている。ルソーはジュリについて次のようにいう。「……私は彼女に会った。その頃、あてなしの恋に酔っていた私である。その酔い心地で目はかすみ、恋の目標は彼女のうえに定まった。私のジュリをドットト夫人に見付け、やがてドットト夫人しか目に見えなくなった。いましがた私の心の偶像を飾りたてたその完璧性が、今は夫人の身についている。」⁽²⁵⁾ ルソーが接した多くの女性を追ううちに、自然と共通項に行き当たる。それはいずれもルソー自身の姿なのである。彼の女主人公たちは美しいばかりでなく、自分に対する敵意や憎悪にも敏感で傷つきやすい気質を持っている。ルソーはそれが自分自身の感覚でもあることを知っていた。しかし、彼の場合、その繊細さが却って敵を作り出すものになることの矛盾に苦しんでいた。それだけに無心に人を受け入れることの出来る心の豊かさと無邪気さにといつも羨望を感じていたに違いない。ドットト夫人に会ったのはそのような時であった。彼女のように、人を嫌うような心を持っていない性格が自分にとって望ましいものであった。ルソーが理想とした女性像は彼自身の内なる女性であったといえる。

こうして彼が出会った多くの女性たちの好ましい性格をもとに、ルソーは自らの理想とする女性観を作り上げていった。そしてジュリとソフィーにその魅力の全てを反映させたわけである。それを踏まえて、彼の女子教育論の根底にあるものを探ってみることにする。私は前著において、ジュリとソフィーに対して与えられた教育の差異を明らかにした。ルソーはジュリには女性という性にこだわらない、自由人としての教育を与えた。男性と同じような学問を身に付けさせ、深い洞察力や判断力と自由な行動力を養成するものであった。それに対して、ソフィーには自己の全存在、つまり身体的、精神的世界を含めて全人生を男性に委ねて生きる女性の育成を目的とした教育を与えた。それは学問を

禁じ、家事に役立つことに限定した実用的知識のみの教授、男性に気に入られるための訓練、自らの判断を停止し、宗教の選択を含め全て男性の判断への絶対的服従心の養成などであった。この二つの相反した教育の結果はどうであったらうか。ジュリは自由に放任された結果として自らの道徳観のジレンマに陥り、破滅する。ソフィーは厳しい束縛にも耐え、自らの抑制心を身につけ、理想的な結婚を獲得する。こうして比較するかぎり、自由な教育は失敗し、女性として束縛された教育が成功しているのである。つまり、女性にはある程度制約的、かつ自由規制的教育が必要であるというルソーの主張が、ここに明確に示されたものといえよう。ルソーのこのような女子教育に対する考え方には、やはり彼自身の生き方が反映されているとあってよい。ルソーはジュリに自分の理想を仮託し、自分自身と同じように自由人としての生き方を与えた。彼女が受けた教育も、したがって男性と同じように何の拘束もなかったのである。『エミール』におけるソフィーと同じような理想の女性として設定しながら、この点において著しく異なっている。『ジュリ』を書いたとき、ルソーにはまだ女性たちとの生々しい交遊の記憶が残っていた。それに加えて、楽しかった遠い日々への追憶が、綾をなして彼の夢の国を作り上げていたのである。ドットト夫人は、夢の国の女王として、いわば完成された女性として登場したのだから、それ以上の教育は必要なかったし、その完成に至るための教育の在り方などは思い及ばなかったのであろう。しかし、女性の自由人的生き方の行きつくところは、自分の経験からも、決して幸せをもたらすものではないことを、ルソーは感じとっていた。上流階級の女性に対する自由教育の結果については、ルソーは一面では評価しながらも、決して認めていなかったのである。ジュリはこうして破滅的な結末を迎えることになる。ジュリへの教育は誤りであった、とルソーは考えた。その否定として彼は『エミール』のソフィーにおいて自然人としての厳しい、拘束的な女子教育論を展開するのである。それでは、その教育論はどのような動機から生まれたのであろうか。

それは、ヴァランス夫人が持つ倫理感覚に対する、彼自身の強い不信感に由来するものであった。ルソーがヴァランス夫人を理想の女性のひとつの形とし

て考えていたことは事実であるとしても、完成された理想像ではなかった。あくまで情動的なもので、母として、姉としてであった。崇拜の対象としながらも、ヴァランス夫人の倫理感覚はルソーにとっても頭の痛いことであった。彼女の多情について彼女はルソーにこう話している。「多情の戒めなどというのは風紀上の掟に過ぎず、分別ある人間がそれを時宜に応じて解釈し、適用あるいは例外を設けたところで神に背く心配は少しもない。」⁽²⁶⁾ このことはルソーの信条とは明かに異なる。大病以後、情念的には燃え上がってはいいても、性的な興味を失い、純化した精神的な愛の生き方をしばしば賛美しているように、ルソーは本質的に精神的性向が強いのである。彼はヴァランス夫人の非倫理的な行動については、かなり悩んだ。あのレ・シャルメットでの幸福な時間の美しさを壊すまいという想いもあった。彼女のいつ始まるかもしれない「不行跡」については、夫人には内緒で祈りさえ捧げているのである。「いつまでもわたしたち二人を徳の道において導き給え。そこからはずれませんように。……わたしたちの結合のうえに聖なる祝福を垂れ給え」また、お互いのうえに徳による強い結合を約束し、ヴァランス夫人の徳的な制約が、自分の上だけにだけあるようにと、必死の思いだった。それでも彼女の行動には許しがたい苛立ちを感じ、「以後、私は他人には寛大に、自分には厳格にいたします。誘惑に抵抗し、純潔のうちに暮らし、すべてにおいて節度を守り、徳によって許された楽しみしか自分に許しません。ことに怒りと短気を抑えます」と祈っている。⁽²⁷⁾

ルソーはヴァランス夫人を介して三角関係を二度経験している。最初は彼が21歳の時、夫人宅の実質上の運営者であり、彼女の愛人であったクロード・アネとの関係であったが、すでに述べたように彼は消極的にはあるが、その関係を容認できた。まだ若く病弱でもあったルソーにとってアネは夫人宅では先輩にあたり、しかも資質的にも能力的にも自分を上回り、或る程度尊敬できる人物であったからである。二度目の場合は、長期にわたる留守のあと、26歳で夫人宅に戻ったとき、すでに年若い髪結い職人が彼の代役をしていた。この時のルソーは以前よりも自己完成度が高く、自信に満ちていた。しかも今度の相手はアネの場合とは違い、自分よりもあらゆる面ではるかに劣った人物

であった。彼の自尊心は決定的に傷つき、その怒りと憤りは頂点に達したと思われる。そして、その矛先は敬愛する夫人の道徳的なだらしなさ、倫理感の欠如へと向けられ、ひいては彼女がそれを植え付けられた教育、すなわち彼女の最初の恋人であり、家庭教師であったタヴェル氏の教育方針の誤りの追求へと向けられていったのである。「こうした道徳もすべてタヴェルの主義にしたがっていた。」ルソーは「自分の道徳は彼の主義に少しも反していない」と主張するヴァランス夫人の言葉をどんな思いで聞いていたのであろう。タヴェルが純真で何も知らなかった彼女を手に入れるためにどんな教育を施したのか、ルソーには判っていた。どれだけ辛い思いで、得々と彼の主義を語るヴァランス夫人の顔を見つめていたことであろう。ルソーは女性を自然人として扱い、自然人としての徳の涵養を自然に任すという教育方針に疑いを持ったのは、おそらくこの時ではなかつたらうか。このことがやがて、ジュリおよびソフィーの対照的な教育に生かされることになったとあってよい。つまり、ヴァランス夫人の不道徳とそれを植え付けた教育との密接な関連性に気付いたうえで、ルソーは女子教育に対する考え方を確立した。それは、女性は生れつきいかに善良であろうとも彼女が受けた教育如何によってはいくらでも悪しき人間性へと傾き得ることであり、さらに重要なこととして、女性は男性よりも従順であるが故に与えられた教育による影響を多く受けやすい、ということである。従ってルソーは、女子教育にあたっては男性のように、自然に任せて自由に育ててはならない、女性は或る年齢になるまではある程度の枠のなかで束縛した教育をなすべきである、という教育方針を主張するに至ったわけである。

『新エロイーズ』と『エミール』において二種類の相反する女子教育の方針を提示し、その上で、ジュリ的教育を否定し、ソフィー的教育を肯定してきた彼の意図を、我々はここに見いだすことができるのである。ルソーは若き頃、自らの家庭教師の体験を踏まえて教育に対する独特の教育論を作り上げていたが、自分自身については、その短気で気紛な性格ゆえに教師としての適性を欠いていると判断している。「私は家庭教師として必要な知識は持っていたし、その才能もあると思っていた。マブリ氏の家で過ごした1年の間に、そういらた誤

った考えからさめた。もしもかっとなつて荒れ狂わなければ、生まれつき穏やかな私は、この職業に適していただろう。万事がうまくいき、世話や苦勞を惜しまなかつたのが、成功していくのを見るかぎり、私は天使だった。万事がうまくいかなくなると、私は悪魔だった。生徒たちが私の言うことを理解しないと、私は無茶をし、彼らが悪意を示せば、殺してしまったかもしれない。』⁽²⁸⁾ 教育方針がいかによくても、教師としての適性がなければ教育の意味がないことを十分承知していたのである。さらに批判されるように、彼がテレーズとの間の5人の子供達への教育を全く放棄したことも、言うなれば彼自身が教育の実践者として不適格であるとの自覚によるとも考えられよう。しかし、そのことよりも、教育技術に優れ、性格的にも教育者的適性を持ったものが、誤った教育方針を巧みに教えこむことの危険を、ルソーはより多く懸念したのである。まさにそれが、ヴァランス夫人が受けた教育の結果によって確認され、彼の女子教育の方針についての信念を作り上げる原動力となったわけである。

結 論

ルソーは彼の生涯を通じて多くの女性たちに出会ったが、その一人一人から彼は様々なものを得ることができた。彼女たちとの交際により、彼独特の女性観を確立し、また夢想的性格、孤独癖など晩年の彼の行動を決定づける性格を形成するまでに至っている。これらの女性たちが彼の作品や思想に与えた影響は実に多大であるといえよう。とりわけ彼の描いた理想の女性像には、これらの女性たちが持っていた良い面が全て凝集されている。上流階級の令嬢的風格、適度の美貌、聡明で優雅、繊細で愛情深く、そして教養の豊かさ、などである。この女性像は、彼の作品上の人物、ジュリとソフィーのうえに完全に投影され、肉付けされた。とりわけ『新エロイズ』執筆当時、彼の心を捉えたドットト夫人はジュリ的人格形成や行動に多大の影響を与えた。加えて、ルソー自身の行動の美化、彼女への過度の感情移入、心の迷いなども全てがジュリの身の上に反映されたのである。

こうして二人の女主人公は人格的にはともに彼の理想的女性像の具現的存在であったが、教育に関しては相反した形をとった。彼女たちの生き方によって浮かび上がってくる女子教育の方法論的なものに関しては、彼のヴァランス夫人との交際が決定的な要因となっている。つまり、女性とは教育によって想像以上に強い影響を受けやすい存在であるという認識と、夫人の倫理観に対する不信感とから、その思いが反自由教育、束縛的教育へと発展し、『新エロイズ』と『エミール』での女子教育の主張へと展開していったのである。ルソーは『エミール』において、男子のための教育論を克明に展開した。そこでは、人間という存在を自然人として捉え、社会のなかでも完全に自立し、自由人として、もっとも自然な人生を送ることが出来る人間の育成が論じられている。それは他でもない、幼い頃からのプラトンを初めとする膨大な読書や、あらゆる分野にわたる学問によって培われた、ルソー自身の人間への深い洞察力と思索によって確立された、彼独自の人間観に基づくものである。その人間観は、『社会契約論』や『人間不平等起源論』などの他の著作の源流にもなっている。『エミール』の教育論は、いわば、彼の高邁な人間観に基づいた理想の教育の在り方が形而上的に展開されたものと言える。それに対して、彼の女子教育論には、彼自身が出会った女性達の具体的な姿からの体験的な要素が強い。そこにはどうしても彼の感傷や過去への郷愁が入りこんでくるのである。それ故に、『エミール』の教育論を支える、骨太い、普遍的人間観に比較して、ルソーの女子教育論はより偏狭な、個人的な女性観と、その時々的情感的な心の揺れ動きによって支えられている様に見える。その意味で、ルソーの女子教育論は、彼の精神面から分析する限り、上流階級の一部における偏った私的教育の色彩が強いと言えるのである。このことから、彼の女子教育を公的教育の視点で捉えなおすことも、今後必要となる。

《註》

- (1) *Emile*, V p. 693 la seule chose que nous savons avec certitude est que tout ce qu'ils ont de commun est de l'espèce, et que tout ce qu'ils ont de

- différent est du sexe; sous ce double point de vue nous trouvons entre eux tant de rapports et tant d'oppositions, que c'est peut-être une des merveilles de la nature d'avoir pu faire deux êtres si semblables en les constituant si différemment¹.
- (2) 横山ひろみ, *La Nouvelle Héloïse* から *Emile* へ —二つの女性像の考察— 親和女子大学研究論叢, 11号, 1978。
- (3) 『告白』 I, p. 20 *Les Confessions* p. 11 Je suis persuadé que je lui dois le gout ou plustot la passion pour la musique qui ne s'est bien développée en moi que longtems après.
- (4) 同 I, p. 24 *ibid.*, p. 15 Comme M^{lle} Lambercier avoit pour nous l'affection d'une mere, elle en avoit aussi l'autorité, et la portoit quelquefois jusqu'à nous infliger la punition des enfans, quand nous l'avions méritée.
- (5) 同 I, p. 52 *ibid.*, p. 41 Dans cette étrange situation mon inquiete imagination prit un parti qui me sauva de moi-même et calma ma naissante sensualité. Ce fut de se nourrir des situations qui m'avoient intéressé dans mes lectures, de les rappeler, de les varier, de les combiner, de me les approprier tellement que je devinsse un des personnages que j'imaginois, que je me visse toujours dans les positions les plus agréables selon mon gout, enfin que l'état fictif où je venois à bout de me mettre me fit oublier mon état réel dont j'étois si mécontent.
- (6) 同 I, p. 52 *ibid.*, p. 41 On verra plus d'une fois dans la suite les bizarres effets de cette disposition si misantrope et si sombre en apparence, mais qui vient en effet d'un cœur trop affectueux, trop aimant, trop tendre, qui, faute d'en trouver d'existans qui lui ressemblent est forcé de s'alimenter de fictions.
- (7) 同 I, p. 58 *ibid.*, p. 47 Dieu vous appelle, me dit M. de Pontverre. Allez à Annecy; vous y trouverez une bonne Dame bien charitable, que les bienfaits du Roi mettent en état de retirer d'autres ames de l'erreur dont elle est sortie elle-même.
- (8) 同 II, p. 59 *ibid.*, p. 49 Je vois un visage petri de graces, de beaux yeux bleus pleins de douceur, un teint eblouissant, le contour d'une gorge enchanteresse.
- (9) 同 II, p. 61 *ibid.*, p. 50 Son éducation avoit été fort mêlée. ... son caractère aimant et doux, sa sensibilité pour les malheureux, son inépuisable bonté, son humeur gaye, ouverte et franche ne s'altérerent jamais; ... Ses erreurs lui vinrent d'un fonds d'activité inépuisable qui vouloit sans cesse de l'occupation.
- (10) 同 V, p. 219 *ibid.*, p. 196 La longue habitude de vivre ensemble et d'y vivre

- innocemment, loin d'affoiblir mes sentimens pour elle les avoit renforcés, mais leur avoit en même tems donné une autre tournure qui les rendoit plus affectueux, plus tendres peut-être, mais moins sensuels. A force de l'appeller maman, à force d'user avec elle de la familiarité d'un fils je m'étois accoutumé à me regarder comme tel. Je crois que voila la véritable cause du peu d'empressement que j'eus de la posséder quoiqu'elle me fut si chère.
- (11) 同 II, p. 100 ibid., p. 87 Aussi son souvenir m'afflige-t-il moins à cause du mal en lui-même, qu'à cause de celui qu'il a dû causer.
- (12) 同 IV, p. 151 ibid., p. 134 Quand elle approchoit de mon visage son museau sec et noir barbouillé de tabac d'Espagne, j'avois peine à m'abstenir d'y cracher.
- (13) 同 V, p. 212 ibid., p. 190 Mademoiselle Lard³, vrai modele d'une statue greque, et que je citerois pour la plus belle fille que j'ai jamais vue, s'il y avoit quelque véritable beauté sans vie et sans ame.
- (14) 同 VI, p. 290 ibid., p. 264 Non, maman, lui dis-je avec transport; je vous aime trop pour vous avilir; votre possession m'est trop chère pour la partager: les regrets qui l'accompagnerent quand je l'acquis se sont accrus avec mon amour; non, je ne la puis conserver au même prix. Vous aurez toujours mes adorations; soyez-en toujours digne: il m'est plus nécessaire encore de vous honorer que de vous posséder. C'est à vous, ô Maman, que je vous cède; c'est à l'union de nos cœurs que je sacrifie tous mes plaisirs. Puissai-je périr mille fois, avant d'en goûter qui dégradent ce que j'aime.
- (15) 同 VI, p. 292 ibid., p. 266 Prenez la femme la plus sensée, la plus philosophe, la moins attachée à ses sens, le crime le plus irremissible que l'homme dont au reste elle se soucie le moins puisse commettre envers elle, est d'en pouvoir jouir et de n'en rien faire.
- (16) 同 VIII, p. 423 ibid., p. 391 Je la revis...¹ dans quel état, mon Dieu! quel avilissement! que lui restoit-il de sa vertu première?
- (17) 同 VII, p. 360 ibid., p. 331 Il falloit, pour tout dire, un successeur à Maman; puisque je ne devois plus vivre avec elle il me falloit quelqu'un qui vécut avec son élève, et en qui je trouvasse la simplicité, la docilité de cœur qu'elle avoit trouvée en moi.
- (18) エミール V, *Emile*, p. 709; 710 La première et la plus importante qualité d'une femme est la douceur: ... Elles seront toute leur vie asservies à la gêne la plus continuelle et la plus sévère, qui est celle des bienséances: il faut les exercer d'abord à la contrainte, afin qu'elle ne leur coûte jamais rien, à dompter toutes leurs fantaisies pour les soumettre aux volontés d'autrui.

- (19) ルソー研究, 人間ルソーの章 (樋口謹一・鶴見俊輔・多田道太郎) より第三者から見たテレーズ。
- (20) 告白 IX, p. 24 *Les Confessions*, p. 413, 414 J'ai toujours regardé le jour qui m'unît à ma Therese comme celui qui fixa mon être moral. ... Le doux caractère de cette bonne fille me parut si bien convenir au mien que je m'unis à elle d'un attachement à l'épreuve du tems et des torts, et que tout ce qui l'auroit du rompre n'a jamais fait qu'augmenter.
- (21) 同 VII, p. 315 *ibid.*, p. 289 On ne fait rien dans Paris que par les femmes. Ce sont comme des courbes dont les sages sont les asymptotes; ils s'en approchent sans cesse, mais ils n'y touchent jamais.
- (22) 同 IX, p. 22 *ibid.*, p. 412 ... et ne m'y seroit peut-être pas venue une seule fois en ma vie, quand je l'aurois passée entière auprès d'elle: non que j'eusse pour sa personne aucune repugnance; au contraire; j'aimois peut être trop comme ami pour pouvoir l'aimer comme amant. ... Elle étoit fort maigre, fort blanche, de la gorge comme sur ma main. Ce défaut seul eut suffi pour me glacer: jamais mon cœur ni mes sens n'ont su voir une femme dans quelqu'un qui n'eut pas des tétons.
- (23) 同 IX, p. 52 *ibid.*, p. 439 Mad^e la Comtesse de Houdetot approchoit de la trentaine et n'étoit point belle. Son visage étoit marqué de la petite vérole, son teint manquoit de finesse, elle avoit la vue basse et les yeux un peu ronds: mais elle avoit l'air jeune avec tout cela, et sa physionomie à la fois vive et douce étoit caressante. Elle avoit une forest de grands cheveux noirs naturellement bouclés qui lui tomboient au jarret: sa taille étoit mignonne, et elle mettoit dans tous ses mouvemens de la gaucherie et de la grace tout à la fois. Elle avoit l'esprit très naturel et très agréable; la gaité, l'étourderie et la naïveté s'y marioient heureusement: elle abondoit en saillies charmantes qu'elle ne recherchoit point, et qui partoient quelquefois malgré elle. Elle avoit plusieurs talens agréables, jouoit du Clavecin, dansoit bien, faisoit d'assez jolis vers. Pour son caractère il étoit angélique; la douceur d'ame en faisoit le fond, mais hors la prudence et la force il rassembloit toutes les vertus. Elle étoit surtout d'une telle sureté dans le commerce, d'une telle fidélité dans la société que ses ennemis-mêmes n'avoient pas besoin de se cacher d'elle.
- (24) 同 IX, p. 43 *ibid.*, p. 430 Je me figurai l'amour, l'amitié, les deux idoles de mon cœur, sous les plus ravissantes images. Je me plus à les orner de tous les charmes du sexe que j'avois toujours adoré. ... Je fis l'une brune et l'autre blonde, l'une vive et l'autre douce, l'une sage et l'autre foible, mais d'une si

touchante foiblesse que la vertu sembloit y gagner.

- (25) 同 IX, p. 54 *ibid.*, p. 440 Elle vint² je la vis, j'étois ivre d'amour sans objet, cette ivresse fascina mes yeux, cet objet se fixa sur elle, je vis ma Julie en Mad^e d'Houdetot, et bientôt je ne vis plus que Mad^e d'Houdetot, mais revêtue de toutes les perfections dont je venois d'orner l'idole de mon cœur.
- (26) 同 IV, p. 255 *ibid.*, p. 230 ... tant elle étoit intimément persuadée que tout cela n'étoit qu'une maxime de police sociale, dont toute personne sensée pouvoit faire l'interprétation, l'application, l'exception selon l'esprit de la chose, sans le moindre risque d'offenser Dieu.
- (27) 『告白』桑原武夫訳の注釈より 1736~1738年頃のルソーの2つの祈りの文句が残っていると桑原氏が指摘している。
- (28) 同 VI, p. 293 *ibid.*, J'avois à peu près les connoissances nécessaires pour un Precepteur et j'en croyois avoir le talent. Durant un an⁴ que je passai chez M. de Mably j'eus le tems de me desabuser. La douceur de mon naturel m'eut rendu propre à ce métier si l'emportement n'y eut mêlé ses orages. Tant que tout alloit bien et que je voyois reussir mes soins et mes peines qu'alors je n'épargnois point, j'étois un ange. J'étois un Diable quand les choses alloient de travers. Quand mes élèves ne m'entendoient pas j'extravagois, et quand ils marquoient de la méchanceté je les aurois tués: ce n'étoit pas le moyen de les rendre savans et sages.

《使用文献》

J. J. Rousseau: *Les Confessions* Bibliothèque de la Pléiade

Emile

La Nouvelle Héloïse

『告白』	小林善彦訳	ルソー全集	白水社
『告白』	桑原武夫訳	世界文学全集	筑摩書房
『エミール』	樋口謹一訳	ルソー全集	白水社
『新エロイズ』	松本勤訳	ルソー全集	白水社
ルソー研究	桑原武夫編		岩波書店